

ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究・授業研究の出会いと交流

Encounter and Interchange between German Didaktik and Curriculum and Instruction
Research in the United States

中野 和光

Kazumitsu NAKANO

(福岡教育大学学校教育講座)

要 約

ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究・授業研究はそれぞれ特徴的であるが最近では接近が見られる。本稿は、19世紀と20世紀におけるドイツ教授学と米国のカリキュラム研究・授業研究の交流の歴史をたどり、1990年代における両者の特質と最近の接近を検討した。ドイツ教授学は教師に教育実践の指針を与えることを主眼とし、「内容」を重視している。解釈学的方法においてもっとも特徴的である。米国はカリキュラム研究と授業研究は別々に行われ、カリキュラムは社会的文化的世界を客観的に一定の手続きをもって提示しようとする。授業研究は経験科学的である。

キーワード：ドイツ教授学、カリキュラム研究、授業研究、解釈学、経験科学

1. はじめに

ウエストベリー Ian Westbury によれば、事柄の発端は、アリゾナ大学のドイル Walter Doyle がドイツでのセミナーで、カーシュ Arnold Kirsch の数学教育の論文を見たことに始まる。この論文に興味を持ったドイルがそれをウエストベリーに見せたところ、それは古典的なギムナジウム教授学、教科教授学のそれであるということになった。では、ギムナジウム教授学とは何か、と言うことになった。ウエストベリーも分からないと言うしかなかった。

1990年、オスロ大学における会議で、ウエストベリーは、オスロ大学のグンデム Bjorg B.Gundem とホプマン Stefan Hopmann との会話の中で、キールのクリスチャン-アルブレヒト大学の科学教育研究所の所員に「教授学とは何か」とたずねた。彼らは、授業と教師教育についての長く続いた思考の核心でギムナジウム教授学はその一部に過ぎない、1960年代に輸入されたカリキュラム研究の伝統と複雑な関係にある、1980年代に伝統的な教授学に対して新たに関心が生じている、教授学の伝統とカリキュラム研究の伝統との間の多くの諸問題が開拓されなければならない、と述べた。

この会話の後、「教授学、カリキュラム研究に出会

う」グループが結成された。スイスのアアラウ、ドイツのキール、ノルウエイのオスロ、の3カ所で会議が開かれた¹⁾。

これらの会議の結果、3冊の書物が出版された。それらは次のとおりである。

Stefan Hopmann and Kurt Riquarts eds., *Didaktik and/or Curriculum*, Institute für die Pädagogik der Naturwissenschaften an der Universität Kiel, 1995.
Stefan Hopmann and Bjorg B.Gundem eds., *Didaktik and/or Curriculum: An International Dialogue*, Peter Lang, 1998.

Ian Westbury, Stefan Hopmann and Kurt Riquarts eds., *Teaching as Reflective Practice-The German Didaktik Tradition*, Lawrence Erlbaum, 2000.

また、「欧州教師教育主題ネットワーク (TNTEE)」は、「教職の科学としての教授学/教科教授学？」という特集において、ドイツ教授学と米国の授業研究の対比を行っている。

Brian Hudson et al ed., *Didaktik/Fachdidaktik as Science (-s) of the Teaching Profession?*, TNTEE, Vol.2, No.1, October 1999.

ここでは、最初に、19世紀と20世紀における両者の交流の歴史を説明して、それから、これらの4冊の書物と関連する文献にもとづいて、両者の特質と相互接近について報告して見たい。

2. 19世紀における交流

(1) 米国の教育関係者によるプロイセンの教育制度の見学

19世紀前半における米国人によるプロイセンの教育制度の報告書には、3つある。バッチェ Alexander D. Bacheのもの、バーナード Henry Barnardのもの、マン Horace Mannのもの、の3つである。それらは、公教育制度の組織、学校の形態、授業、教員養成、憲法と教育制度との関係、などについて述べている²⁾。

(2) 米国におけるドイツの教育施設の設立

米国におけるドイツの教育施設の設立で有名なものは、1855年、シュルツ Margarethe Schurz によるウイスコンシン州ウオータータウンにおける幼稚園の設立である。1873年には、ハリス William T. Harris によって公立幼稚園が設立されている³⁾。フレーベルの理念は、パーカー Francis W. Parker によって、ドイツの遠足、作文という方法とともに、米国の教育実践の中に移入された。

(3) 米国人のドイツ留学とヘルバルト教育学の米国への移入

19世紀には、多くの米国人がベルリン大学、イェナ大学、ハイデルベルグ大学、ゲッティンゲン大学などのドイツの大学で学んだ。19世紀を通じて約1万人がドイツの大学に留学している。彼らは、新人文主義のBildungの理念、新しい知識を開拓する学問研究の態度、国家試験に備えるための専門的技能の訓練(Ausbildung)、といったことを学んだと言われる⁴⁾。

教育学においては、マクマリー兄弟、ドガーモ、ヴァンリュウ、らの留学によるヘルバルト教育学の米国への移入が大きな意味をもっている。彼らの組織した全国ヘルバルト協会が後の全国教育研究協会の前身である。

(4) 19世紀末期におけるプロイセン国民学校に関する報告書

1890年代において、プロイセンの国民学校に関する二つの報告書が作成されている。一つは、パーソンズ James R. Parsons、もう一つはプリンス John T. Prince によるものである。それらは、義務制学校の出

席、教師教育、中央集権的教育行政、カリキュラム、手工訓練について報告している。彼らはドイツの教師教育、カリキュラム、手工訓練を称賛し、米国のそれらの貧弱さを指摘した。ドイツにおける個人と国家、軍隊に関する関係が米国にそのまま入って来ることに對する不安も存在した⁵⁾。

3. 20世紀における交流

(1) ドイツ職業学校・補習学校の米国への影響

19世紀末から20世紀初めにかけて、米国の中には、ドイツの職業学校・補習学校に対する強い関心が存在した。背景には、ドイツ経済の躍進があった。1910年秋には、ケルシェンシュタイナー G. Kerschensteiner が、米国において職業訓練について各地で講演した。ドイツの職業学校・補習学校のすばらしさが認識されると同時に、それらに対する保留も米国人の間には存在した。徒弟制度が米国とドイツでは違い過ぎること、米国においては分業が進んでいて、職人層が無視し得るほど少ないこと、ドイツ式の職業教育は米国社会をより厳格な階層社会にすることが恐れられたこと、ドイツの職業教育が愛国心、製造業者の利益と結び付いたものであると言う非難、といったことが保留の背景にあった。デューイ J. Dewey による、職業ハイスクールは階級学校であるという批判は有名である⁶⁾。

(2) 進歩主義教育時代の交流

米国の進歩主義教育の理念は1925年ハイデルベルグで行われた「子どもの諸力の解放」と題する New Education Fellowship の講演会をきっかけとしてドイツに影響を与え始めた。ピーターゼン Peter Petersen は、パーカーのダルトンプランに出会い、1927年の New Education Fellowship の、ラカルノにおける講演会において、自分自身のイェナプランを発表する。ピーターゼンは1928年には訪米して、パーカー、ウッシュバーンに会っている⁷⁾。

このように米国の進歩主義教育の理念はドイツに影響を与え始めたけれども、ドイツ観念論の主流は米国の実用主義の哲学に対してはその受け入れを保留した⁸⁾。

(3) 第二次世界大戦後の交流

①ハインリッヒ・ロートの教育学的人類学

ハインリッヒ・ロート (1906-1983) は、第二次世界大戦前は、国家社会主義の体制に協力したが、戦後、米国の経験的研究、心理学的分析、学習心理学にかかわる文献を統合して、教育学的人類学に集大成した⁹⁾

(1966、1970)。

②ロビンゾーンのカリキュラム研究

米国のカリキュラム研究を積極的に取り入れたのはロビンゾーン S.B.Robinson である (1967)。一時はカリキュラム熱が高まったが、1980年代には下火になった¹⁰⁾。

4. 1990年代の交流

(1) チュービンゲン会議

1992年6月、チュービンゲンにおいて、ドイツと米国の教育の相互の影響を討議しあう会議が開かれた¹¹⁾。この会議の報告は『ペダゴギカ・ヒストリカ』誌の33巻1号(1997)に掲載されている。

(2) 「教授学、カリキュラム研究に出会う」プロジェクト

5. ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究の特質

(1) ドイツ教授学の特質

ここでは、メンク Peter Menck にしたがって、ドイツ教授学の特質を次のようにとらえて見たい。

ドイツ教授学は、コメニウスの『大教授学』、ラトケの教授学、ヘルバルトの『一般教育学』、ディースターベークの『教職教養指針』を経て、ディルタイ、ノール、ヴェーニガー、クラフキー、等の解釈学的教授学を主流としている。教師の教育実践の指針を与えることを主眼としている。ヘルバルトが『一般教育学』において、「教育内容」による教育的教授を教育の中核においたように「内容」を重視することを特徴とする。「内容」は、コメニウスの『世界図絵』に見られるように、子どもと大きな世界をつなぐもの、文化を「教授学的に縮小した (didactic reduction)」もの、範例的に世界を開示するもの、である¹²⁾。

(2) 米国のカリキュラム研究の特質

米国のカリキュラム研究は、スペンサーの「いかなる知識がもっとも価値があるか」(1859) という論文を淵源とする。テラーの『科学的管理法』に影響を受けたボピットの『カリキュラム』(1918) を経て、タイラーによって、教育目的を達成する教育的経験の選択・組織化としてその構成手続きが定式化されたものである。ドイツ教授学に見られるような「内容」論がその研究から抜けていると言われる¹³⁾。また、米国においては、カリキュラム研究と授業研究は別個であ

る。

6. ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究・授業研究の対比

英国のリード William Reid は、米国のカリキュラム研究とドイツ教授学を次のように対比している¹⁴⁾。

米国の学生にとって、教育は創造を助けるべき世界に客観化されたものとして提示される。米国の学生にとって、社会的文化的世界は (経済システム、政治システムのような) システムからなる客観的構造である。カリキュラムの仕事はこの構造を生徒に提示し、自分たちがその中のいかなる位置にいるかを決定することである。米国の社会は共和的で世俗的である。それは一人一人が理性的判断をすることを前提としている。そこでは権威ある教えはない。真理は自分にだけ真理である。米国のカリキュラム理論の特徴は、内容の提案だけではなく、内容を収集する手続きにも権威を与えていることである。授業においても、内容を選択し、提示し、学習過程を管理する普遍的手続きが語られる。

米国のカリキュラム理論と对象的なのは、ドイツのクラフキーの「授業の準備の核としての教授学的分析」である。それによれば、Bildungとは「世界の秩序ある関係を発達させた個人の状態」(Theodor Litt) であるが、このような望ましい状態を生起させる学習の本質的要素 (陶冶財) を確認することが教授学である。このような教授学の立場からは、学習の必要性、階層性、内容についての権威ある教えが可能である。すべての意志が相対的なのではない。教師は権力と権威を持っている。教師は単なる instructor なのではない。教師は教材に感動しなければならぬ。正直かつまじめに。教師は獲得されるべき知識を代表するなら、子どもたちを教育するという仕事を満足することができる。

授業研究については、フィンランドの研究者カンサネン Perti Kansanen は、ドイツ教授学と米国の授業研究の違いについて、次のように説明している¹⁵⁾。

ドイツにおいては、20世紀の初めに、ヘルバルト教授学に代わって、精神科学的教授学が主流になって以降、教授学と教育心理学は別個の学問とされた。ドイツでは、州のカリキュラムや教師教育のガイドラインが必要され、教授学がその要求に応えた。精神科学的教授学は教育内容の理論の開発を主要な仕事とする。教育内容はカリキュラムと授業におけるその価値によって選択される。その意志決定は、伝統と歴史にもとづいて行われる。目的と目標は内容の選択に含まれる。方法の問題、学習の問題とは、別個にこのような内容に関する理論を哲学的に考察しようとする。この点が精神科学的教授学が批判される点である。内容の

選択を主要な仕事とする精神科学的な教授学は教科教授学と密接な結合をしている。

ドイツにおいても、経験科学的な授業研究の動きがあった。例えば、20世紀の初めに、レイ W.A.Lay や、モイマン E.Meumann らは、実験教育学を提唱した。ピーターゼン P.Petersen は、教育学的状況における記述を提案した。しかし、こうした教授学は、精神科学的教授学の周辺におかれた。シュルツ W.Schultz や、ハイマン P.Heimann らのベルリン学派の教授学は、経験科学的側面を持っていたが、次第に精神科学的教授学に接近し、徐々に、その側面は失われていった。

米国においては、授業研究は教育心理学の研究者が行っている。経験科学的である。米国人は、ヘルバルト教育学のうちの教育心理学の部分だけを取り入れたと言われる。米国では、教授モデルはビジネス生活のモデルと同じである。大企業の労働者が動機づけられるように、教師は動機づけられ、管理される。その雰囲気は、教師の独立した、自律的行動を奨励するものではない。米国では、教育心理学が教育の科学的位置を占めた。教育心理学においては、デューイではなく、ソーンダイク E.L.Thorndike が中心的位置を占めた。その思考は断片的で、行動主義的で、実験的で、教育の全体的過程に適用するには狭すぎた。実際の問題がその思考を導いた。それは、地方教育行政に役だった。カリキュラムと授業の「内容」は無視された。

シュルマン L.Shulman が「教育学的内容知識」を提案してから、米国の授業研究は、「内容」に注目するようになった。しかし、その場合の「内容」は、学習、動機づけ、成績に焦点を当てていて、なお、教育心理学的であった。教授学や教科教授学の伝統とは異なっていた。もし、似ているものがあるとすれば、それは、生徒の発達段階や生活状況の分析から内容を選択しようとしたベルリン学派であった。

批判的コミュニケーション教授学は、価値判断にもとづいて内容を選択する。一方、米国の批判的教育学は、規範的、政治的ではあるが、教科と方法に焦点を当てているわけではない。

このように考えて見ると、米国の教育心理学のような授業研究は、ドイツにおいても、実験教育学、記述的教育学、ベルリン学派の教授学として、存在した。批判的教育学も、焦点を当てるところは違っても、ドイツにも米国にも存在する。カンサネンによれば、精神科学的教授学とその他の教授学というのがもっとも単純な図式である。

7. 両者の接近

19世紀の初めには、ドイツ人は米国のことをあまり良く知らなかった。米国人もドイツの学校のことをあまり良く知らなかった。交流が進むにつれ、米国人は

ドイツの教育の中にある帝政的要素や階級社会的要素について警戒した。ドイツ人は逆に米国の実用的な側面についてはその受け入れを保留した。一方、米国がヘルバルト教育学を受け入れ、ロートが米国の文献をもとに教育学的人類学を構築したように、その優れていると思われることについてはお互いに受け入れている。リードやウエストベリーの対比に伺われるように、ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究はそれぞれ特徴的であるが、最近はカリキュラムの再概念主義の立場は、クラフキーの批判的構成的教授学とよく似ているとクラフキー自身が述べているように、両者の接近が見られる。

ドイツ教授学のような内容研究が抜けていると言われる米国のカリキュラム研究において、今日、カリキュラムの国家規準を集大成した書物は『内容知識』(1995)である。ただし、国家規準を定めて、教師にその実施を求めるところはなお米国的である。

ドイツ教授学の方は、州の規則を越えて、カリキュラムを研究する米国のカリキュラム研究のよさを受け入れて、内容を重視し、教科教授学を強化することによって昔の強さを復活させたと言われる。

職業教育についても、米国のSchool-to-Work運動に見られるように、米国において、再び、ドイツ職業教育のデュアルシステムに対する関心が高まっている。

授業研究は、米国においては、教育心理学の研究者が行っている。米国は目的は倫理学に、方法は心理学に問う、というヘルバルト教育学のうち、方法は心理学に問うという部分をたしかに受け入れたのである。米国の心理学的授業研究はソーンダイクの行動主義心理学の影響を強く受けたものだった。その心理学的授業研究も今日、「内容」に注目し始めている。しかし、その研究はなお教育心理学的で、ドイツの精神科学的な教授学の内容研究とは異なっている。

ドイツにおいても、経験科学的な教授学は存在したが、それらは徐々に精神科学的な教授学に接近している。精神科学的な教授学は、教科教授学と結びついて昔の強さを復活させたと言われる。ドイツ教授学は20世紀を通して、北欧の中では、ノルウェーとデンマークにおいて良く知られていた。ノルウェーのイムセン Gunn Imsen は、精神科学的教授学の規範的性格は、記述的分析的方法を取り入れて、「近代化」される必要があると述べている¹⁸⁾。精神科学的教授学が内容と方法を分離して考察するやり方は克服される必要がある。精神科学的教授学が教科教授学と結合するとき、このことは特に課題となるであろう。

引用文献

- 1) Ian Westbury, Stefan Hopmann and Kurt Riquarts eds., Preface, in Ian Westbury et al eds., Teaching as a Reflective Practice-The German Didaktik Tradition, Lawrence Erlbaum,2000,pp. iv-vi.
- 2) Karl-Ernst Jeismann, American Observations Concerning the Prussian Educational System in the Nineteenth Century, in Henry Geitz et al eds., German Influences on Education in the United States to 1917,Cambridge University Press,1995,pp.21-42.
- 3) Ann Taylor Allen,American and German Women in the Kindergarten Movement, 1850-1914,in Henry Geitz, op. cited, pp.85-102.
- 4) Konrad H.Jaralusch, American Students in Germany, 1815-1914:The Structure of German and U.S.Matriculants at Göttingen University, in Henry Geitz op.cited,pp.195-212.
- 5) Gregory P.Wegner,Prussian Volksschulen through American Eyes: Two Perspectives on Curriculum and Teaching from 1890s,in Henry Geitz,op.cited,pp.59-68.
- 6) Derek S.Linton,American Responses to German Continuation Schools during the Progressive Era,in Henry Geitz,op.cited,pp.69-84.
- 7) Hermann Röhrs, Progressive Education in the United States and its Influences on Related Educational Development in Germany, Pädagogica Historica, 38, 1997, no.1. pp.45-68.
- 8) Ibid.
- 9) Dietrich Hoffmann,The Adoption of American Educational Theory in West Germany after 1945-, Heinrich Roth, Pädagogica Historica, 38, 1997, no.1, pp.277-290.
- 10) Peter Menck, Looking into Classroom,Ablex,2000.
- 11) Jürgen Heideking, Introduction, Mutual Influences on Education:Germany and the U.S.-from World War I to the Cold War, Pädagogica Historica,38,1997,no. 1 .
- 12) Peter Menck,Looking into Classroom, op. cited, pp.19-40.
- 13) Walter Doyle and Ian Westbury, Die Rückbesinnung auf der Unterrichtsinhalt in der Curriculum und Bildungsforschung in den U.S.A.,Bildung und Erziehung, 45, 1992, no.2, S.137-157.
- 14) William Reid, Systems and Structures or Myths and Fables? a Cross-Cultural Perspective in American Context, in Bjorg B. Gundem and Stefan Hopmann eds.,Didaktik and/or Curriculum, Peter Lang, 1998,pp.11-28.
- 15) Pertti Kansanen,The Deutche Didaktik and the American Research on Teaching, in Brian Hudson et al,ed., Didaktik/Fachdidaktik as Science (-s) of the Teaching Profession?,TNTEE,vol.2,no.1,October 1999, pp. 21-36.
- 16) Wolfgang Klafki,Characteristics of Critical-Constructive Didaktik, in Bjorg B. Gundem and Stefan Hopmann eds., Didaktik and/or Curriculum, Peter Lang, 1998, p.327.
- 17) Stefan Hopmann and Kurt Reuquarts,Starting a Dialogue: Issues in a Beginning Conversation between Didaktik and the Curriculum Tradition, Journal of Curriculum Studies, vol.27, no.1, 1995, pp. 3 -12.
- 18) Gunn Imsen,Reflection as a Bridging Concept between Normative and Discriptive Approaches to Didaktics, in Brian Hudson et al ed.,op.cited, pp.95-106.

本稿は、福岡教育大学教育実践総合センター授業研究会・日本教育方法学会第2回授業研究会(平成13年7月14日、於福岡教育大学)における発表「ドイツ教授学と米国のカリキュラム研究の出会いと交流」に若干の加筆と修正を加えたものである。